

## エマヌエーレ・コッチャにおける自己同一性の解体 ——混合としての生とアヴェロエス主義

大久保 美紀 (情報科学芸術大学院大学)

### 発表要旨：

本発表の目的は、イタリア出身の哲学者エマヌエーレ・コッチャ (1976-) の思想が提示する生の理解を手がかりに、自己同一性の枠組みがいかに解体されうるかを示し、現代における主体概念の再考へと接続することである。

コッチャは『植物の生の哲学』(2019) および『メタモルフォーゼの哲学』(2022) において、あらゆる生を環境との混合として捉え、その連続性のうちに存在を位置づける生命論的存在論を提示してきた。前者では、植物的生の本質が環境への浸透にあり、生命は大気の生成と呼吸を通じて自己と環境を相互に変容させる過程として理解される。他方後者では、あらゆる生が相互浸透のなかで絶えず変容しつつ関係を再編成する存在であることが論じられ、異種混濁こそが生の基本構造であることが明らかにされる。

こうした思考の背景には、アヴェロエス主義を扱った博士研究『La trasparenza delle immagini: Averroè e l'averroismo (イメージの透明さ——アヴェロエスとアヴェロエス主義)』(2005) とイメージの存在論に関する初期著作『La vie sensible (感性的な生)』(2010) に通底する自己同一性の問いがある。コッチャが批判の対象とするのは、思惟する主体の一貫した同一性を前提とするデカルト的認識論である。アヴェロエスの思想は、中世に大きな論争を引き起こした知性単一説をめぐる議論として知られているが、コッチャにとって問題の核心は、知性の数的同一性そのものよりむしろ、個々の認識の差異がイメージの存在論に関わる点にある。この観点によれば、「私」とは閉じた内的中心としてではなく、イメージや環境との関係のうちに位置づけられる。近代における主体の形成は、すなわち、認識の複数の次元を単一の意識的主体のもとに把握しようとする枠組みとして理解できる。

本発表ではまず、コッチャにおける混合としての生の哲学とその思想的基盤としてのアヴェロエス主義の理解を整理する。その上で、近代主体における自己同一性の概念を対照的に位置づけ、生を混合と連続性から捉える立場がいかにこの枠組みを解体するのかを検討する。最終的に、自己同一性を前提とする主体理解の歴史的形成とその内面化を視野に入れたうえで、「私」という概念が個体の内部に閉じたものではなく、環境やイメージとの関係のうちに分散しているという理解が、現代においていかなる批判的意味を持ちうるのか考察する。

### 先行研究リスト

エマヌエーレ・コッチャ『メタモルフォーゼの哲学』松葉類・宇佐美達朗訳、勁草書房、二〇二二年。

エマヌエーレ・コッチャ『植物の生の哲学——混合の形而上学』嶋崎正樹訳、勁草書房、二〇一九年。

Emanuele Coccia, *La trasparenza delle immagini: Averroè e l'averroismo*, Milan, Bruno Mondadori, 2005. (未邦訳)

Emanuele Coccia, *La vie sensible* Trad. Martin Rueff, Barcelone, Rivages poche, 2019. (未邦訳)